

雑詩（六首の其一）

曹植

高臺多悲風

高臺に悲風多く

朝日照北林

朝日 北林を照らす

之子在萬里

之子 万里に在り

江湖迴且深

江湖 迴かに且つ深し

方舟安可極

舟を方ふるも安んぞ極る可けん

離思故難任

離思 故より任え難し

孤雁飛南遊

孤雁 飛んで南に遊び

過庭長哀吟

庭を過ぎて長く哀吟す

翹思慕遠人

思いを翹げて遠人を慕い

願欲託遺音

願わくは 遺音を託せんと欲す

形影忽不見

形影 忽ち見えす

翩翩傷我心

翩翩として我が心を傷ましむ

高い台には悲しい風が吹きよせ、朝日は北の林を照らしている。かの君は万里の彼方にあり、

その間には、ひろびろとして且つ深い長江と湖沼が横たわっている。船を二艘ならべて渡ろうとしても、どうして行き着けようか。

離ればなれにいる思いはほんとうに堪えがたい。

群れを離れてひとりぼっちで飛ぶ雁は南をめざし、

庭を飛び過ぎながら声長く哀しげに鳴く。

それを聞いて感情がつのり、遠くにいる君を慕わしく想い起こした。

せめて私の伝言を雁に託そうと思つた。

だが、その姿はたちまち視界より消え去り、

私の心は急に悲しみに閉ざされてしまった。

《之 子》 兄弟の曹彪を指す。作者自らをいうという解釈もある。

《方 舟》 二艘並べた舟。

《翹 思》 心中急に思慕の情を起こす意。

《遺 音》 伝言。

《翺 翹》 鳥の早く飛ぶさま。

曹植は乱世の勇で文芸にも長けていた曹操の三男で曹丕の弟です。建安二十五年（二二〇）春、曹操は六十六歳の生涯を閉じました。後を継いで魏王となったのは長男の曹丕です。曹丕はその年の十月に献帝から帝位を禅譲され、魏王朝を建て文帝となり、都を洛陽に移します。一方で弟の曹植は都で暮らすことは許されず、鄴城（今の山東省濮陽の東）の侯に封ぜられました。曹丕から派遣された監国使者に監視され、流罪に等しい境遇でした。

曹植は十歳にも満たないうちから、詩経や論語・詩賦などを諳（そ）んじるとんほどの神童ぶりで、その明敏な頭脳と、多彩で繊細かつ流動感にとん

だ詩は父曹操好みで、早くからその才を認めて彼に対する寵愛（ちゆうあい）ぶりは相当なものだったといえます。古来中国では嫡長子相続の習慣はありませんが、しかし結果的には兄の曹丕が太子となりました。曹丕は帝位についてからも才気渾発な曹植に帝位を脅かされるのではないかと、猜疑の念を持ち続けていたようです。

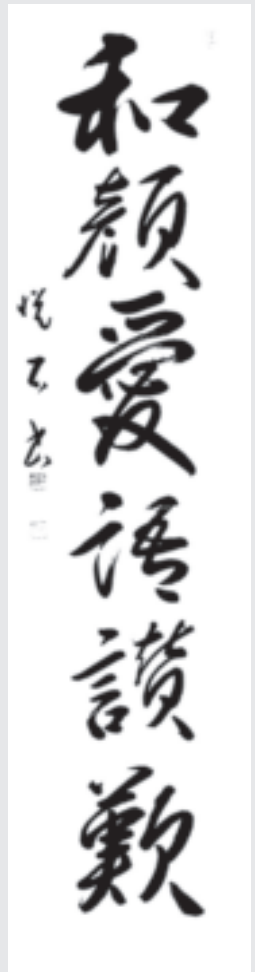
この詩は、雑詩六首のうちの一首目で、二二一年ごろ鄴城にあって、夫と別れて暮らす妻に託して、同じく曹丕に排斥されていた異母弟曹彪（ひょう）を偲んで詠んだといわれます。

冒頭の「高臺は悲風多く、朝日北林を照らす」は都には教令（命令）が多く、君子は小人ばかりを任用することをたどっています。そして湖沼を隔てて遠く兄弟が離ればなれになっている境遇を怨み哀しむ思いを詠んでいます。

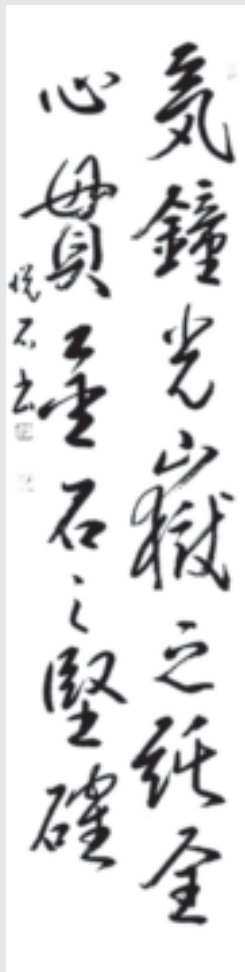
曹操の死後、曹丕と曹植の側近による相続抗争があったと歴史書は伝えますが、曹植自身が曹丕と争う気持ちがあったかは実際のところ不明です。三国志では二人を公平に描いているようですが、「世説新語」などは、概ね兄の曹丕を陰険で冷酷な圧迫者に仕立てて、本来曹植が太子となるべきところを曹丕側が策謀の数々を弄して排斥したように書いています。これは、いわゆる「判官びいき」とも思われますが、曹植の文学者としての優れた一面が後押ししているようです。この詩をよんでもほとんど人が「曹植哀れ」と感じてしまうでしょう。事実、後世の学者や文人の曹植に対する評価は、その大半が曹植を擁護しています。なかには曹植の才能を孔子に比すべき文学者だとまで評している学者もいます。一方、当時の皇室の下した評価は真逆で、前科を追悔する意味の「思」と諡号して痛烈に非難しています。歴史上の人物評価が如何に難しいか、見る者の立つ位置や方向によって変わる好例ともいえるようです。

参考文献：岩波書店「中国詩人選集」集英社「古詩源（下）」NHK出版「漢詩紀行」

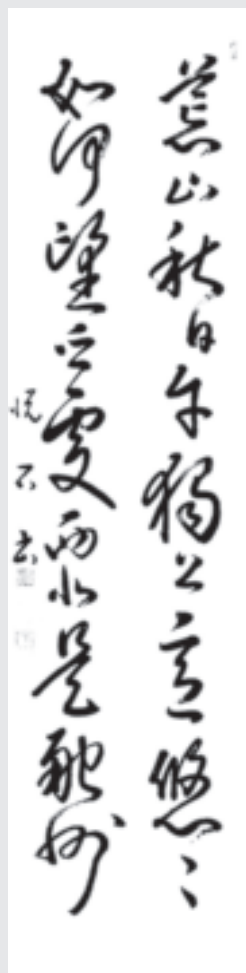
和顔愛語讚嘆



気は光獄の純全を鍾め 心は金石の堅確を貫く

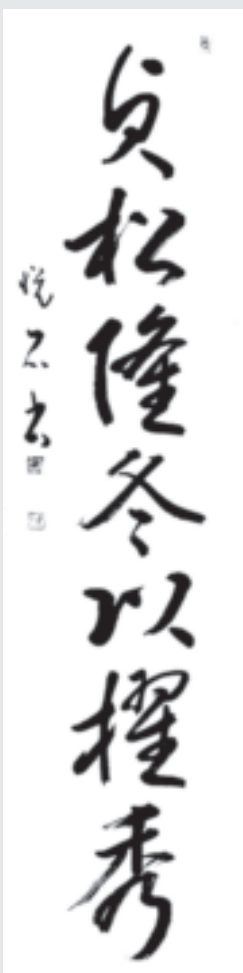


荒山秋日午なり独り上つて意悠々たり 如何ぞ望郷の処 西北のかた是れ融州



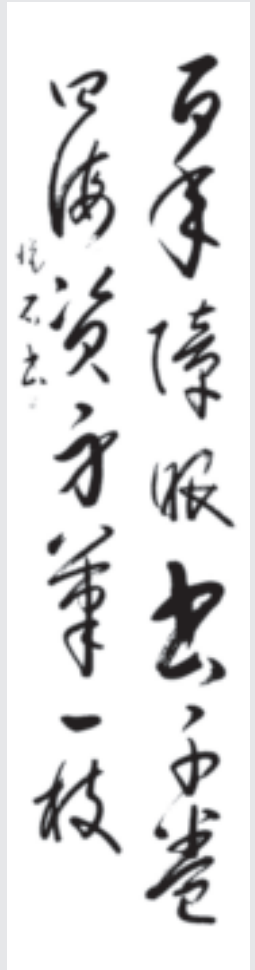
(柳宗元詩・登柳州蛾山)

貞松隆冬以て秀を擢さんず



※今月の条幅部月例出品はお休みです。

百年眼を障る書千卷 四海身を資く筆一枝



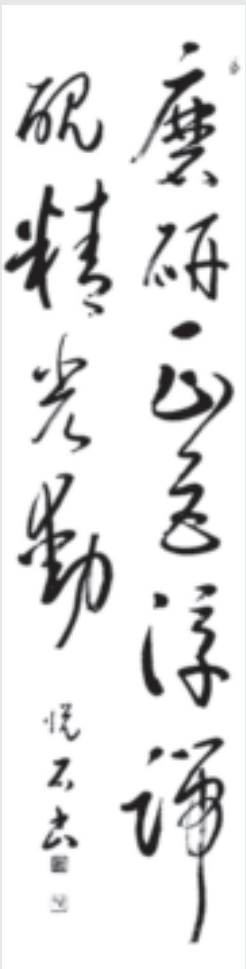
淡処 真味を知る



墨に軽重ありて顕晦を分かち 山に超拔多く精神を見る



磨研正色浮かび 瑞硯精光動く



読み
北風辺馬哀しむ（北風の厳しさに馬が悲しげに鳴いている。「高適詩・自薊北帰」）

北風
辺馬
哀しむ

佐藤象雲書

右側を優勢に
第一面と
対向させる

筆順に注意

四点の長さ
と位置に注意

左右のバランスに注意
強くどしりと
立てる

六面と九面を
弱びやかに書き
左右の均衡を保つ

劣の細線を
首切れよく

北の書体について
古典名跡では「北・比」の右側「匕」と
「化」の「匕」は明解に区別されているが、
小・中学校の書写教科書では混同している
ものが見受けられる。
因みに、片仮名の「匕」は比の劣を取り出して
作られていることから考えても「匕」と
「匕」の混同は正す必要がある。



- 一般部規定課題出品について
- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
 - ・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。
 - ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

馬哀 北風邊

馬哀 北風邊

次号課題

隸書

硯生 微漸入

馬哀 北風邊

びし 微漸 硯に入って生ず

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部	順位	氏名
み吉野の山の秋風さ夜ふゆり ふゆりと寒く衣うらなり		

和泉 溪石 先生書



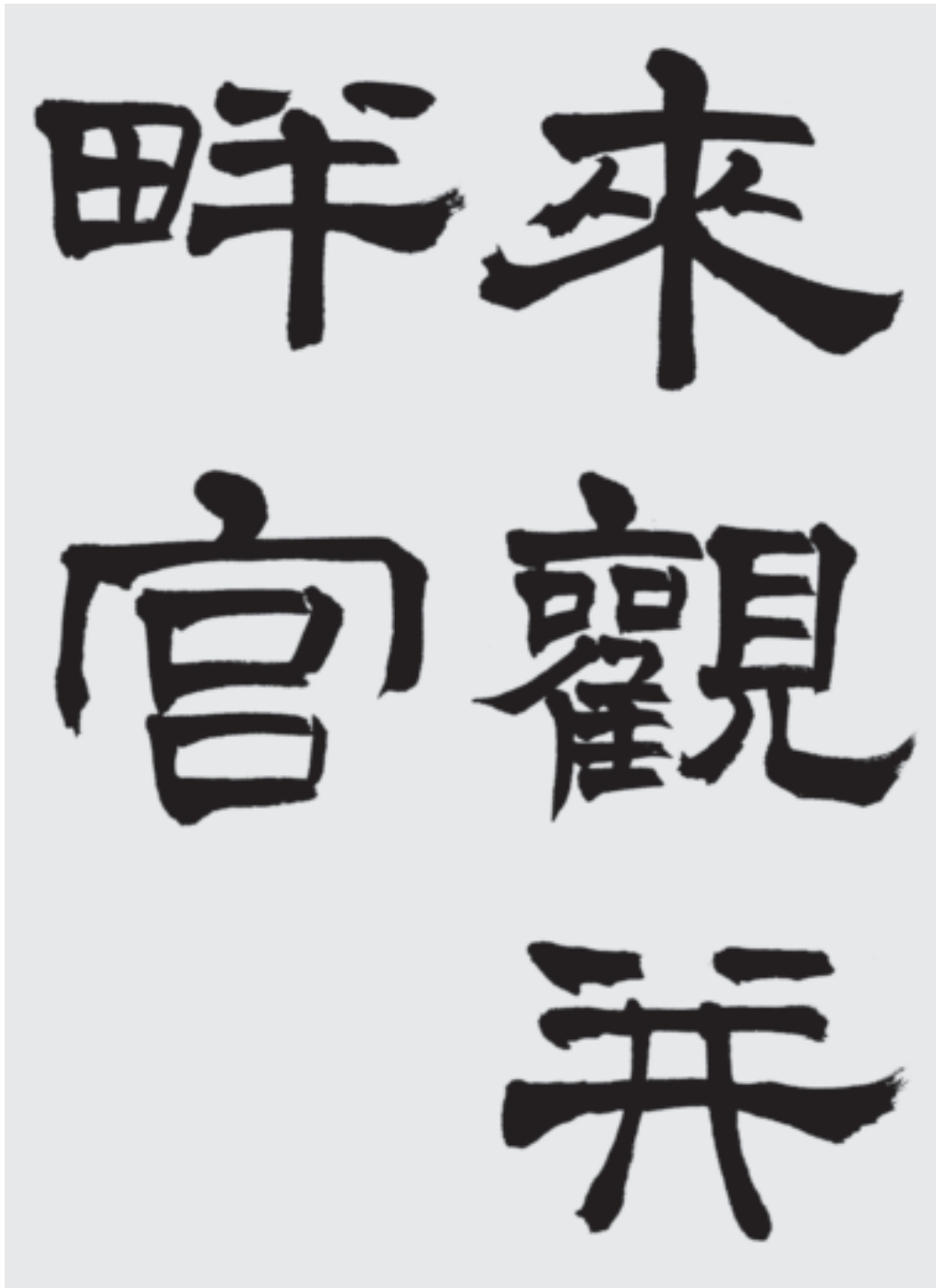
佐藤 象雲 書

音

ウン トウ チウ
ロ ケ ツ イ ソ ウ

略解

雲が騰のぼって雨を降らせ
露が凍こって霜と為る



來觀、并せて畔宮……

■ 史晨後碑ししんこうひ

(後漢・西暦一六九年)の臨書 (8)

象雲臨

『來觀并畔宮』

今月の課題は美しく頗る安定感に富み、史晨碑の真骨頂ともいふべき字群です。縦横画のバランスの取り方と紙面布置の練習には格好だと思えます。

「來」左払いは曲、右払いは直。右払いが下がっているが均衡は保たれている。

「觀」分間布白が正確で厳密な結体。

「并」左右整齊。縦二画は背勢の筆意がある。

「畔」田の右側縦画をやや左に流して、旁とのぶつかり合いを避けている。

「宮」ウ冠は二つの口を深く覆っている。余白の取り方が精妙。

糸竹管弦

糸竹管弦

■王羲之・蘭亭序（東晋・西曆三五三年）の臨書 (10)

象雲臨

糸竹管弦

『糸竹管弦』

王羲之は蚕繭紙と鼠鬚筆を用いて蘭亭序を書いたと言われます。蚕繭紙とは繭から真綿をとり、糸を紡いで織った絹紙。鼠鬚筆は文字通り鼠の鬚で作られた筆で、筆先が利く堅い筆です。結体は同じ字があればみな別の体を構え、二十字ある「之」はすべて変化していて同じものがありません。これは神助があったからで、さらに後日王羲之は数百本書いたといいますが、及ぶものがなかったと言われます。

これらのことは、盛唐時代の何延之の書いた「蘭亭記」に書かれている逸話です。この蘭亭記には、辯才の手元にあつた蘭亭序が藁翼の手によって騙し取られ、太宗の手に渡った蘭亭の話などが載っています。この本によって残された数種の模本とともに「蘭亭序」そのものが伝説化された大きな要因になったといわれます。